

第 203 回商業簿記 採点を終えて

問題 1 については、級数法や取替法は多くの受験者にとってなじみの薄いものだったかもしれません。考え方自体はそれほど難しいものではありませんので、この機会にしっかりと理解しておくようにしてください。なお答案のなかに「減価償却費累計額」というものがありました。減価償却費が累計されたものだという理解にもとづき、このように書きたくなる気持ちは理解できますが、日頃から標準勘定科目表を参照しつつ勘定科目を正確に使用できるように心掛けておきましょう。

問題 2 は自己株式の処分及び分配可能額に関する基礎的な問題でした。それにもかかわらず、できはあまりよくなく、とりわけ (3) の分配可能額の計算は単純な条件であったにもかかわらずほとんどできていませんでした。分配可能額の計算は会社法の細かな規定にもとづくため難しいという印象があるかもしれませんが、本問のような基礎的な部分についてはしっかりと理解しておきましょう。

問題 3 は従来と同様の損益勘定及び閉鎖残高勘定を完成させる問題です。個々の論点についてはオーソドックスなものばかりを出題したつもりでしたが、とてもよくできているといった感じではありませんでした。細かな点ですが、気になった解答として以下のようなものがありました。

- 損益勘定の勘定科目欄に「当期純利益」と解答しているものが散見されました。「当期純利益」は財務表（損益計算書）における表示科目です。損益勘定では振替先の科目名を記入しますので「繰越利益剰余金」になります。
- 閉鎖残高勘定に収益・費用項目を、また損益勘定に資産・負債項目を記入しているものがありました。閉鎖残高勘定はストック（資産・負債・資本）の残高が収容される勘定であり、それに対して損益勘定はフロー（収益・費用）の額が収容される勘定です。解答の際には、「これはストック項目か？フロー項目か？」といったことを意識しながら各勘定に記入するようにしましょう。とりわけ、経過勘定について、この点を勘違いしている解答が散見されましたので注意してください。
- 「前払収益」という解答がありました。収益は受け取るものであって支払うものではありませんので、解答の際には勘定科目の意味を考えながら記入しましょう。
- カンマ (,) か小数点 (.) を明確に区別できないものや、カンマの位取りを正しくできていないものがありました。

第203回会計学

採点を終えて

問題1は正誤問題と、誤りの理由を解答する問題でした。○Xの正答率はかなり高く、受験者の日頃の努力が良く表れているように思います。ただし、少数ですが、理由として問題文の語尾だけを変化させたり、主語なしにごく短く解答するものも見られました。長くなくても結構ですので、明瞭な文で解答していただきたいと思います。

また、8.で繰延資産に計上するという解答が一定数ありましたが正しくありません。繰延資産に計上できないことは、実務対応報告第19号をご確認ください。

問題2は資本取引・損益取引区分の原則に関する問題でした。問1はこの原則を説明する問題でしたが、よく知られた原則をきちんと説明する能力が求められました。問2は剰余金の配当可能性に関する問題でした。受験者のほとんどが正解すると予想していましたが、予想以上の誤りがありました。間違えた受験者には、剰余金に関する基本をもう一度見直すことを勧めます。

問題3はキャッシュ・フロー計算書における利息及び配当金の記載区分を問う問題で、問2と問3は2つの方法が依拠する考え方をそれぞれ説明する問題でした。問3の利息の受取額を投資活動によるキャッシュ・フローの区分に記載する方法は正解者も多かったのですが、問2の利息の受取額を営業活動によるキャッシュ・フローの区分に記載する方法については低い正解率にとどまりました。どちらの考え方も正しく理解しておいてほしいと思います。

第 203 回 工業簿記 採点を終えて

問題 1 は費目別計算における材料に関する基本的な問題で、材料の受け払い処理の基本と付随費用に関連する理解を確認しました。問 1 は材料副費を構成する費目の内容を理解しているか否か、問 2 は材料副費の予定配賦率の算定方法について問いましたが、いずれも正答率は高くなりました。材料副費配賦差異に関する問 3 については、予算差異と配賦差異を混同してしまい、計算結果の金額は正しいのに解答欄を誤っている答案がある程度見られました。原価計算上の原価差異と予算管理上の差異を明確に区別して理解してください。問 4 は、一般的な勘定連絡を前提として、資料にもとづいて材料関係の取引内容、予定価格の適用等の条件を理解したうえで勘定記入することを要求しています。本問のような細かい計算が要求される場合には、計算プロセスを整理してから着実に計算を進めることによって、ケアレスミスを防ぐことができます。

問題 2 は、連産品の原価計算および副産物の処理に関する出題でした。問 1 は副産物に関する仕訳、問 2 は結合原価を按分するための基礎となる等価係数の設定方法、問 3 は連産品原価の計算手法の理解を問うものでした。問われている論点のそれぞれは基本的なもので理解している人が多いと思われませんが、本問では総合的に問うているので最終的な原価の算定まで正確にできる人は比較的になかったようです。副産物と仕損が同一工程で発生しているケースについて、あまり計算したことがなかったのかもしれませんが、それぞれについて原則的な方法を適用すれば容易に正答を導くことができます。

問題 3 は費目別計算における複合費に関する理解を確認するための出題でしたが、複合費自体を正確に理解している人は、かなり少ないことがわかりました。複合費は、小規模企業において部門別計算の代替として利用される場合が多い簡易的な計算手法ですが、実務的には存在意義があるので理解しておく必要があります。なお、問題文において「・・・について述べなさい」あるいは「・・・について説明しなさい」などとある場合には、単語ではなく必ず文章で解答してください。

第203回 上級 原価計算

問題1は、取替投資に関する正味現在価値法の計算問題・理論問題です。具体的には、問1から問6は基本的な計算問題であり、受験者の基礎力を評価することを意図していました。また、問7と問8は、受験者の総合力について評価することを意図していました。

気になったのは、会計上の利益とキャッシュ・フローとの区別ができていない受験者が多かったことです。確認になりますが、会計上の利益とキャッシュ・フローは異なる概念です。この点については、工業簿記・原価計算だけでなく、商業簿記・会計学にも関連します。そのため、両者の考え方の違いについて理解するようにして下さい。また、設備投資の経済性計算の基礎となるキャッシュ・フローの計算ができていない受験者が多く見られたことも気になりました。こうした受験者については、設備投資の経済性計算そのものが理解できていない可能性があります。そのため、公式テキストを読み直し、設備投資の経済性計算で利用される数値、基本的な計算方法、および、意思決定の判断基準などについて、理解しておくようにして下さい。

なお、全体としては、上記のように、利益とキャッシュ・フローの区別や基礎となるキャッシュ・フローの計算で間違えた受験者が相当数見られたため、問題1の正答率は、思ったほど高くありませんでした。

問題2は、設備投資の経済性計算の代表的な方法の一つである内部収益率法に関する問題です。内部収益率法は、時間価値を考慮する正味現在価値法と同様に、公式テキストで詳細に説明されています。本問では、問1と問2で基礎力を評価し、問3で総合力を評価することを意図していました。

気になったのは、基礎力にあたる内部収益率の意味と計算をともに正答できた受験者が少なかったことです。これは、数値そのものを計算することはできるが問われている数値の意味は分からない受験者、もしくは、問われている数値の意味は分かるが数値そのものは計算できない受験者が多いことを示していると思います。こうしたことを防ぐため、受験者には、公式テキストをあわてて読むのではなく、時間をかけてゆっくり読むことをお勧めします。なお、問3を正答できた受験者は、ほとんど見られませんでした。

問題3は、原価企画に関する基本的な問題です。公式テキストでも説明されており、この試験でも過去に出題されていますが、正答率はあまり高くありませんでした。